

福岡

福祉活動専門員の

ま な こ

福祉活動前進のために

No.11 昭和54年12月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 福岡コロニー

時代に即応する

社会体制を

◆嘉穂郡内社協役員研修会から◆

去る七月二十七日午後一時三十分から、嘉穂郡地域社協役員研修会が嘉穂町公民館で開催されました。

県社協の野坂副会長から「現状の社協と将来の展望」について、問題提起がなされました。

「社協発足からの歴史の変遷や、現在の社協のあり方や、住民のための真の福祉をすすめるには、住民のニーズを先ず把握することであり、そのためには、調査をおこない、その結果を広報活動によって、広く住民に知らせ住



民の参加によって、住みよい福祉の町づくりをすることであり、また、日ごとに進んでいく社会情勢に、社協がいつでも即応できる体制づくりが必要である」と力説。

引きつづき、問題提起を中心に四つの分散会で協議研究がすすめられました。

桂川町の「すずめの学校」という学童保育所を、夏休み期間中に開校していることや、嘉穂町の学童保育所の実態、心身障害児親の会の結成をして、相互の連絡を密にして活動を活発にしていること。また、穂波町が校区社協を結成し、より住民に期待される社協づくりを目指していることなどの事例発表がありました。

しかし、嘉穂郡では、まだ法人化されていない社協があります。何と云っても社協は法人化が必要であります。

法人化する手だて、財源の確保、活動できる役員の選出等はどうすべきかなど……熱のこもった意見がつきつぎに出され、住民福祉向上へ、意欲の盛上った研修会でありました。

※ 嘉穂郡は八町があり、郡地域社協連絡協議会を昭和四十八年に結成されました。法人社協は五町でありますが、未法人社協(三町)も含め、役員研修会を毎年開催されています。

◇「お金を入りたいと思うけど、はずかしくて、つい通りすぎてしまうのよねー。でも入れたあととはとてもさわやか」と女学生。おばあさんがサイフを開け立ちどまっていると、横をトップレディ風のお嬢さん達が見て見ぬふりで通り過ぎて行くのであります◇

(稲葉町社協 内田文人)

結婚衣裳の貸出しを始めました

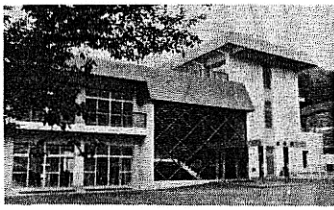
..... 篠栗町社協の活動から

篠栗町社協では十月一日より、町民休養センターにて結婚衣裳の貸出しを始めました。

私たちの生活の簡素化に役立つよう、今まで婦人会で貸出していたのを、社協で取り扱うようになり、女性用で時価一〜三千万円程度の衣裳を譲り受けたいものの、今まで男性用はなく、町民に不便をかけていたので、この機会を利用して、男性用一五〇万円で購入これで男女とも衣裳が揃った訳です。町内に居住するものは誰でも利用できるが、他町の方も利用されます。皆さんも、大いに利用して下さい。

これからの福祉は、不幸な人、かわ

(篠栗町社協 飯島勝吉)



この休養センターで、結婚式と衣裳の貸出しを行っています。

品目	数量	貸出金	
留袖	50枚	3,000~6,000円	
成人用留袖	5 "	3,000~5,000円	
喪(も)服	8 "	2,000円	
打掛	13 "	35,000~40,000円	
白打掛	1 "	35,000~40,000円	
掛下	3 "	打掛に含む	
長襦袢	3 "	打掛に含む	
色直し	8 "	打掛に含む	
モーニング	3着	5,000円	
ダブル	3 "	3,000円	
タキシード	3 "	8,000円	
ドレス	3 "	10,000円	
男物	和服	3 "	8,000円

いそうな人だけが(言葉不足ですが)福祉の恩恵に預かるだけではない。もつと、一般的に福祉が浸透するように心がけて行こうと云うのが、我が社協のあり方である。私が一歩、人と違っている、本当の福祉の道を行っていないかも知れないが、専門員は専門員としての道を歩くよう努力はしています。もし、間違った方向に進んで行くようであれば、先輩の方、宜しくご指導下さいようお願いいたします。

話かはずれましたので、本筋にもどして、貸出し料金と品目一覧表を書きます。

「楽しかったプール遊び」

瀬高町社会福祉協議会

去る八月十二日、私達の社協では身障児親の会との共催で「身障児一日プール遊び」を行いました。町の御好意により町営プールを一日貸切り、真夏の太陽の下で存身障児と親と福祉団体や一般のボランティアが一つとなつて、一日を有意義に楽しくはしゃいで過ごす事ができました。

僕だって泳げるぞ 身障者のプール遊び



水をこわがって泣く子供などひとりもなく、水の中ではしゃぎ過ぎて水を飲んでしまった子、兄弟仲良く助け合って浮袋をおしていく子供達

この日の子供達は、「僕達だって遊べるんだ」「泳げるんだ」と訴える様に全身で泳いでいました。また、社協職員一同、この「身障児一日プール遊び」を通してそれぞれの仲間意識が芽ばえた事、そして親のひたむきな愛や人の暖かい心を今さらのように痛感しました。

この子供達の為に、いくらりっぱな制度や施設ができて、福祉を理解する「人の心」がなければなんにもなりません。私達は、この「人の心」を大切に、ひとつの小さな輪が大きな輪となるよう、地道に活動を続けていきたいと思ひます。

— 今度は、子供達と海で遊びたい — (瀬高町社協 三栗野)

お父さんやお母さんもおいっしょになってゲームに参加してくれました。まさに、ここにひとつの輪ができたのではないのでしょうか。私はそう確信したい。

いわゆる身障者と言えは、性格的歪みや社会性の欠如などから、一般的にまとまった遊びができない子供が多いと見られがちです。でも、それだけの理由で遊びができないとかたづけられないと思ひます。むしろ、今まで遊びの中へ自分から参加した経験がない事・遊びの中へ加えてもらう機会が与えられなかった事、それが為に子供達は遊びたくても遊べなかったし、また遊びを知らないという子供が多いのではないのでしょうか。

お年寄りの執念

ゲートボールが老人の間で爆発的なブームを呼んでいる。老人が三人寄れば、話題の中心はゲートボールのことばかり：「ゲートボールがでけんことなつたげな、生きがいもなんもなかい」「こげな面白かゲームはなか」「球は打ったときのカーンという快音がよかですなあ。それに団体プレーやけん、知らん人も仲良うなれますつたい」：とにもかくにもゲートボール、ゲートボールである。かつて、わが国の老人をこれほどまでに熱狂させたゲームはなかったのではないだろうか。

このゲートボール、真赤なユニホームを着て少女みたいに喜ぶおばあさんに、教え、教えられていくうちに、ほのかな恋心を芽生えさせるおじいさんの結構、回春剤の役目も果たしているようだ。

用具代はあまりかからないし、ちょっとした広場さえあれば十分で、まさに安上がりのゲームである。

こういうことで、いまや町内大会、校区、市郡と大会の規模が膨らんできている。そこで、今年十月に県老連主催で初の市郡対抗の大会も開かれるまでになった。

しかし、厄介な問題がある。それは地域によって、ルールがまちまちな

赤いユニホームでゲートボール

だ。そこで、主催者としては、各地のルールを混ぜ合わせた仮規則づくりをした。なにせ、親ほくとはいえ、勝ち負けを決める大会であり、しかも大会でハッスルすることを生きがいにしてる老人も多いだけに気の使いようも大変なのである。

提供 福岡県老人クラブ連合会



十月三十日の県老連のゲートボール大会は三二チームが参加してにぎわった。

BOOKあらかると

障害児とそうでない子供が共に遊び遊べるようになるために大人も子供も読んで理解してほしい本。

『わたしたちのトピアス』

大きくなる 借成社

先日、若宮町で年に一度の「専任職員研修会」が開かれた。「専門員を除く」という（御触れ）を無視し、警見させていただったので、おわびのしるしとお歳暮をかねて、ひとこと記すことにした。

ちょうど一年前に発行された「まなこ」（第9号）の最終ページに「社協職員の連帯を求めて」という報告があった。筆者の名前が書かれていないので、県社協の職員が編集委員さんがまとめられたものと思うが、それには、昨年度の「専任職員研修会」で出された問題が紹介されている。その内容を挙げてみると

- 第一に社協職員の身分保障、待遇改善に関する事、
- 第二に研修内容の工夫、最後に職員間の横のつながりを深めようという提案がなされたことである。

私たちの職場は、市町村の規模によって多少の違いがあるにせよ、よく言えば、少教精鋭、実態は一人教役という要素に、てんでこ舞い、キリキリ舞い、これではとても身体がもつ舞いという条件下にある。

これまでも何度かの研修機会で、いわゆる団体業務の整理をはじめ、事務領域の洗い直しをやらなければ、現状では、在宅福祉サービスやボランティア

握手の前に、言っておきたい

専任職員研修会 所感

了活動の推進といった地域福祉問題への対応にまで手が回らないという意見が続出した。

それらは、個々の職場でのうっ積した想いの噴出であり、そのうっぶん晴らしを「連帯」への第一歩にするのであれば、おおいに歓迎されてよい。しかし、残念ながら今日に至るまで大勢は動いていない（と、私には思える）。

意見や要望は、たしかに発言する当人にとっては、彼の日常の実感や言葉にしたものであることが少くない。ところが、それを聞いてうなずいている人の本音は、全く別の方向さへ指していることがあるのだ。

建前上、間違ではないから、とりあえず「賛成」の拳手をし、また「何とか善処したい」などと空手形をきるハダカラ、オトナハシンヨウデキナイ。

今回の研修会でも同じことを感じましたし、耳にした。反省会でも出されたという専門員との合同研修は数年前から問題にされていたと記憶している。

「県社協の指導責任」や「横のつながりを」という声も、いささか色あせて感じるようになった。

疲れているのかも知れない。けれど少しは真面目に生きたいと思う。どうだろうか。

(直方市社協 高石伸人)

アルコールとふくし



久留米市社協
松尾 誠次郎

「星のない夜空にむけて、アルコールのたっぷり入った大砲を放つと、ふと何年か前の同じ仕種であったのが脳裏に走った。その日は、M地区の身障青年たちと妻茶を飲みながら障害者と結婚について論議を交していた。結婚したいが相手がいらない。出合の機会が少ない。云々。さだまさしの「関白宣言」の後半、老境を唄って「俺より早く逝ってはいけない。何もいらぬ俺の手を握り、涙のしずく、二つ以上こぼせ。お前のお陰でいい人生だったと俺が言うから、必ず言うから」というセリフが女性をしびれさせるといふ。しかし、7秒に一組の離婚時代。そう結婚は華やかなものでもないし、ドラマチックに終りはしない。障害者の青年は、それでも俺は結婚したいという。否、自分のあるがままの姿をみとめ、ハンディを乗りこえようとして、いる彼は人間的につよく、よき夫たるだろう。しかし、身障者だから結婚が難しいのじゃなく、健常者だっていい相手がみつからずにいる人はゴマンといふ。だから、いろんなサークルに顔出して自分から友達創らなげや。筋ジンスの彼らと夢を飲んだ日の方が大砲のキヨリがよく飛んだ事を覚えていた。

「今日も駅前で一合一勺のコップをテンプラ片手にあおり、一日の結びをした。元来アルコールが身体にあらうタイプではなかったが仕事が生を魅惑の世界へ引き込んだとも言える。今年度に入って、おぼあちゃん大学。定年予備校。ちびっ子祭。高校生ワークキャンプ。くるめ祭身障者と老人のためのサービステーション。など企画に追われ9月以降もユニークな企画に殺される。2ヶ月がかりで「昔のあそびハンドブック」を完成させたが、こちらは老人の力でつくりあげた。その間、地区の住民との交流や青年、ボランティアやハンディキャップ小集団との会合を重ねていく。アルコールはうまいはずである。筑後地方の社協に青年の専門員も増したので、小生の若造の頃先輩諸氏から受けたアルコール付のオルガナイザーについての授業をおおいに重ねたいと思っている。昨日は、移動入浴車について廻った。Iさん(85才)の腰に手を突込んでタンカに乗せる時の重い事。たった40kgしかないのに。Iさんが湯舟につかってニコリとする顔は、お婆さんに言わせると久しぶりに見たという。帰宅して我家のテレビに説明すると「ババ、僕もオジちゃんになったらしてあげるヨ」といふ。この時もアルコールがうまかった。10月の中旬の熊本県・佐賀県の専門員研修に参加する予定だが、仲間と交わす酒も一段とうまかろうと今から楽しみにしている。

市町村社協の動向

今年度になって、法人化したところと専門員。

志免町 吉村正実(新規)
庄内町 野見山正範(新規)
また、専門員が交替したところは次のようになっています。

大野城市 安藤正男(退職)
萩原 隆(異動)
豊津町 福田 從信(役場異動)
杉本勝次(役場出向)

以上の方々をよろしくお願いいたします。また、各ブロックの連絡会にも参加されますように併せてお願いいたします。

お詫び

今年度二回目の「まなこ」をお届けします。発行は十一月初めの予定であったため、原稿を寄せて下さった方々は九月末までに書かれた方が多く、十二月末発行では期日があわないものがあり、せつかくの熱意を任なしたようので申し訳なく思っております。

来号は九月初めに原稿募集をいたしましたように「わが市、わがまち、わが社協」といったことを特集したいと思いますのでご協力をお願いします。
(まなこ編集委員一同)



編集後記

◇あのシンボルマークが目に見える、あの軽快なメロディーが耳に残り、あの世界の子供たちのあどけない表情が心に焼きついた一年、国際児童年が終ろうとしている。◇私には、あのいたいたけな子供たちが何かにおびえた瞳をいっばいに開いた姿が、まぶたを離れず心が痛む。◇ユニセフがすすめる、開発途上国の子供たちの拠金が、目標の一億円を突破したとある。ところが敗戦後の日本が世界各国から受けた援助は、数十億円に達するという記事を読んだ。◇十億、二十億といった利益を遊興に使う公的な社会があったり、公金を分け取りするような公僕があったりすると、一億円というお金が小さくみえてしかたがない。◇でも、たとえ小さい額でも、まさに貧者の一灯として、尊く崇高である。昨今の共同募金に寄せる心根よりはるかに貴重な気がする。◇それと、全社協あたりが、この拠金運動にあまり力を入れていないような感じがする。もっと大々的に運動を展開したら、もっとたくさんのお金もったお金が寄せられたはずである。◇今年も専門員諸氏にとっては多忙な一年であつたらう。福祉という、とてつもない大きな広場を亀のような足で歩いている感じの毎日、月並みだが「お互いに変化でしょうが頑張りましょうや」。

(飯塚市社協 石上淳裕)